舌に発生した神経鞘腫の2例

吉田 雅 司・向 井 洋・友利 優一・若松 常信
山下 佐 英

Schwannoma of the tongue: Report of two cases

Masashi YOSHIDA・Hiroshi MUKAI・Yuichi TOMORI
Tsunenobu WAKAMATSU・Sukehide YAMASHITA

Abstract: Schwannoma is relatively rare in the oral region. We reported 2 cases of schwannoma of the tongue.

Case 1: A 12-year-old girl complaining of a tumor of the tongue visited our hospital. Examination revealed a red bean-sized tumor in the left dorsal surface of her tongue. After excision under local anesthesia, the histopathologic findings indicated schwannoma.

Case 2: The patient was a 16-year-old girl having a thumb tip-sized tumor in the left apex surface of the tongue. The tumor was excised under local anesthesia and histopathologically diagnosed as schwannoma.

The postoperative courses of both cases have been satisfactory without recurrence.

Key words: schwannoma (神経鞘腫), tongue (舌), Antoni A type (Antoni A 型)

緒 言 症 例

神経鞘腫は、Schwann 細胞由来とされる腫瘍で、Neurinoma, Neurilemmoma, Schwannoma が同義語として使用されている。本腫瘍の好発部位は脊髄神経、聴神経および皮膚の末梢神経で、有髄神経の分布領域ではいずれの部位にも発現する可能性があると考えられている。顎口腔領域における本腫瘍の発生は比較的まれであるが、舌に好発するとされており、その他に口蓋、顎下部、頬部、口底、口唇、歯肉、まれに唾液腺、顎骨内にも認められる。今回、舌に発生した神経鞘腫の2例を経験したので、その臨床的概要に若干の文献的考察を加えて報告する。

症例1

患 者：12歳，女児。

初 診：昭和58年11月■日。

主 訴：舌背部の腫瘍形成。

家族歴：特記事項なし。

既往歴：6歳時より某大学および当大学病院矯正科にて反対咬合の治療を受けている。

現病歴：8歳時に左側舌背部に腫瘤を認めるも放置していた。昭和58年11月■日，当大学病院矯正科より同腫瘍について紹介され，当科を受診した。

現 症

口腔外所見：体格中等度，栄養状態良好で異常所見は認められなかった。

口腔内所見：左側舌背部に小豆大で境界明瞭な半球状，弾性硬の腫瘤を認めた。色調は赤色を呈し，被覆粘膜は平滑で，圧痛は無く可動性であった（写真1）。

臨床診断：舌良性腫瘍。

処置ならびに経過：上記診断のもとに，昭和58年11月■日，局麻下に，腫瘍を含め紡錘状に切除した。術後5年5か月経過の現在，再発もなく予後良好である。

鹿児島大学歯学部第1口腔外科学教室

（主任：山下佐英教授）

First Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Kagoshima University Dental School (Chief: Prof. Sukehide Yamashita)

受付日：平成元年5月8日

写真 1 初診時口腔内写真

写真 4 初診時口腔内写真

写真 2 摘出腫瘍の病理組織像
(弱拡大像, H-E 染色)

写真 5 摘出物

写真 3 摘出腫瘍の病理組織像
(中拡大像, H-E 染色) 写真 6 摘出腫瘍の病理組織像
(中拡大像, H-E 染色)

病理組織学的所見：腫瘍は舌の筋組織内に存在し、周囲との境界は明瞭で薄い被覆に被われていた（写真2）。腫瘍細胞は紡錘形で、長楕円形の核は典型的な柵状配列を示し、Verocay 小体を示す Antoni A 型の組織像を呈していた（写真3）。

病理組織学的診断：神経鞘腫（Antoni A 型）。

症例2

患者：16歳、女性。

初診：昭和60年6月■日。

主訴：左側舌尖部の腫瘍形成。

家族歴：母親が脳腫瘍で入院中。

既往歴：特記事項なし。

現病歴：昭和57年頃、左側舌尖部に腫瘍を認めるも放置していた。以後、症状に変化はみられなかったが、昭和60年6月■日、当大学医学部附属病院からの紹介にて当科を受診した。

表 1 当科における神経鞘腫 (1966~1985)

No.	年 齢	性	部 位	受診までの期間	自覚症状	大きさ (mm)
1	26	女	右耳介前部	—	腫 瘤	手拳大
2	12	女	右顎下部	3 年	腫 脹	35×50
3	17	女	舌背部	5 年	腫 瘤	5×5×7
4	8	女	左軟口蓋部	—	腫 瘤	3×4
5	17	男	右舌縁部	8 年	腫 瘤	23×21×18
6	66	男	左顎下部	2 か月	腫 瘤	鶏卵大
7	14	男	舌背正中部	11 年	腫 瘤	17×15×14
8	39	女	左頬部	5 年	腫 瘤	22×18
9	41	女	右舌尖部	1 か月	接触痛	12×13
10	19	女	左舌背部	3 年	腫 瘤	34×28×20
11	12	男	右口蓋部	2 年	腫 脹	40×30×25
12	40	男	口蓋部	7 か月	腫 瘤	2×3
13	12	女	左舌背部	6 年	腫 瘤	小豆大
14	16	女	左舌尖部	3 年	腫 瘤	20×15×15

現 症

□**口腔外所見**：体格中等度，栄養状態良好で特に異常は認められなかった。

□**口腔内所見**：左側舌尖部に母指頭大で境界明瞭な半球状弾性硬の腫瘤を認めた。色調は赤色を呈し，被覆粘膜は平滑で，圧痛はなく，可動性であった（写真4）。

臨床診断：舌良性腫瘍。

処置ならびに経過：上記診断のもとに，昭和60年6月■日，局麻下にて腫瘍摘出術を施行した。腫瘍は周囲との癒着もなく一塊として摘出できた。術後3年10か月の現在，再発もなく予後良好である。

□**摘出物所見**：大きさは15×15×20 mm，薄い被膜に被われた球形に近い腫瘍で，表面平滑，灰白色，弾性やや硬であった（写真5）。剖面は充実性で帯黄白色を呈していた。

病理組織学的所見：腫瘍は線維性結合組織よりなる薄い被膜で被われ，腫瘍細胞は紡錘形または小球状の濃染した核を有しており，また，核の柵状配列が一部にみられた。間質は疎で繊細な線維性結合組織からなっていた（写真6）。

病理組織学的診断：神経鞘腫（Antoni A 型）。

考 察

神経鞘腫は，1910年 Verocay¹⁾ によって神経鞘の Schwann 細胞に由来する外胚葉性腫瘍として Neurinoma と命名された。以来，これを支持する説，神経周囲の結合組織由来の中胚葉を起源とする説，あるいは両説を取り入れるなどさまざまな論議がなされた²⁻⁵⁾。現

在では，神経鞘腫は Schwann 細胞に由来するという考えが一般化しており⁶⁾，Neurinoma, Neurilemmoma, Schwannoma が同義語として用いられている。

病理組織学的分類では，Antoni の分類が広く用いられており，間質は線維性で，紡錘型の核をもつ腫瘍細胞の柵状配列を示す Antoni A 型（束状型），変性による網状細胞がみられ，間質に硝子様変性あるいは脂肪変性による空胞を含む Antoni B 型（網状型）および混合型に分けられる。その他に，Willis⁷⁾ は束状型，網状型および類上皮細胞型に分類し，百井⁸⁾ は瀰漫性束状型（第Ⅰ型），限局型（第Ⅱ型）および網状型（第Ⅲ型）に分類している。

神経鞘腫は有髄神経の分布する部位に発生し，脊髄神経，聴神経，皮膚末梢神経に好発し⁹⁾，顎口腔領域における発生は比較的まれとされている。遠城寺ら¹⁰⁾によると良性軟部組織腫瘍 8,086 例中，神経鞘腫は血管腫，脂肪腫について多く 825 例で，頭頸部 242 例と報告している。本邦における顎口腔領域の非歯源性良性腫瘍中に占める発生頻度は，三原ら¹¹⁾ 316 例中 6 例（1.9%），百井⁸⁾ 115 例中 5 例（4.3%），大坪ら¹²⁾ 10 年間に 5 例（1.1%），松田ら¹³⁾ 3 年間に 4 例（1.9%），菊地ら¹⁴⁾ 126 例中 4 例（3.2%）である。また，吉井ら¹⁵⁾ 良性腫瘍 348 例中 2 例（0.5%），白本ら¹⁶⁾ 良性腫瘍 384 例中 2 例（0.5%），塩田ら¹⁷⁾ 腫瘍性被検臨床病理材料 266 例中 0 例などの報告があり，その他に山崎ら¹⁸⁾ の 15 年に 5 例，生田ら¹⁹⁾ の 27 年間に 4 例，梶山ら²⁰⁾ の 9 年間の入院患者中 1 例などの報告がある。

当教室の昭和41年1月から昭和60年12月の20年間にいて病理組織学的診断の確定した非歯源性良性腫瘍 456

例のなかで、本腫瘍はこの2症例を含めて14例(3.1%)であった。当教室における14例については、部位別には舌7例(50%)、口蓋²¹⁾3例(21.4%)、顎下部2例(14.3%)、耳介前部1例(7.1%)、頬部1例(7.1%)で、舌の発生率が高率で、顎口腔領域における好発部位が舌とする亀谷ら²²⁾の報告と一致している。また、発生年齢は8~66歳と広範囲におよんでいるが、平均年齢24.2歳で青壮年者に多く、特に舌については12~41歳、平均19.4歳で、あきらかに低年齢層に多発する傾向があった。性差は、男女比5:9、また舌についても男女比2:5で、女性に多く発生する傾向が認められた。また、受診までの期間および腫瘍の大きさは、さまざまであったが、受診時の自覚症状は腫瘤形成がほとんどであった(表1)。

治療法としては、本邦の報告例でも切除摘出によって良好な結果が得られるとされている。しかし、当教室でも悪性神経鞘腫が経験されており²³⁾、悪性化の疑われるものは周囲組織も含めて完全な切除摘出が望ましい。本2症例はいずれも再発は認められず、経過良好である。

結 語

10歳女兒の左側舌背部および16歳女性の左側舌尖部に発生した神経鞘腫の2例について、その概要を若干の文献的考察を加えて報告した。

本論文の要旨は、昭和60年9月7日、第47回日本口腔外科学会九州地方会(大分)において発表した。

引 用 文 献

- Verocay, J.: Zur Kenntnis der "Neurofibrome". Ziegler Beiträge zur Path Anat 48: 1-69 1910.
- Masson, P.: Experimental and spontaneous schwannomas (Peripheral Gliomas). Am J Path 8: 367-416 1932.
- Stout, A.P.: The peripheral manifestations of the specific nerve sheath tumor (Neurilemmoma). Am J Cancer 24: 751-796 1936.
- Penfield, W.: The encapsulated tumors of the nervous system. Surg Gynec & Obst 45: 178-188 1927.
- Herxheimer, G. und Roth, W.: Zum Studium der Recklinghausen'schen Neurofibromatose. Ziegler Beiträge zur Path Anat 58: 317-389 1914.
- 石川梧朗監修: 口腔病理学Ⅱ, 改訂版, 永末書店, 京都, 1982, 590-591頁.
- Willis, R.A.: Pathology of tumors. 6th ed, Butter Worths, London, 1960, p 842-856.
- 百井一郎: 神経鞘腫の病理学的研究. 新潟医誌 69: 737-757 1955.
- 北村 武: 頭頸部腫瘍. 医学書院, 東京, 1971, 349頁.
- 遠城寺宗知, 岩崎 宏, 他: わが国における良性軟部組織腫瘍. 癌の臨床 20: 594-609 1974.
- 三原 学, 加藤麦夫, 他: 小児下顎骨体部に発生した神経鞘腫の1例. 日口外誌 31: 201-206 1985.
- 大坪千春, 逢坂文博, 他: 舌神経鞘腫の2例(抄). 日口外誌 29: 2117 1983.
- 松田 登, 四文一泉, 他: 神経鞘腫の症例とその電顕所見について. 日科誌 25: 445-450 1976.
- 菊地正明, 三浦英子, 他: 舌神経鞘腫の1例. 日口外誌 25: 419-421 1979.
- 吉村和子, 亀山忠光, 他: 口底部に発生した神経鞘腫の1例. 日口外誌 28: 1216-1219 1982.
- 白本光鶴, 白本光七, 他: 下顎骨体部に発生した神経鞘腫の1例. 日口外誌 29: 547-552 1983.
- 塩田研次, 山本弘之, 他: わが教室4年間における被検臨床病理材料422例について. 日科誌 6: 437-443 1957.
- 山崎 正, 武田 進, 他: 顎口腔領域に発生した神経鞘腫5例. 日口外誌 27: 968-976 1981.
- 生田信孝, 小幡幸男, 他: 顎下部に発生した神経鞘腫の1例. 日口外誌 6: 189-191 1960.
- 梶山 稔, 鬼塚謙治, 他: 舌神経鞘腫の1例. 日口外誌 21: 328-335 1975.
- 若松常信, 向井 洋, 他: 上顎に発生したSchwannomaの1例. 日口外誌 32: 479-482 1986.
- 亀谷明秀, 中谷明秀, 他: 歯槽粘膜に発生した神経鞘腫の1例. 日口外誌 27: 91-99 1981.
- 杉原一正, 堂原義美, 他: 頬部に発生した悪性神経鞘腫の1例. 日口外誌 28: 1694-1697 1982.